いつわって？カレカノ！

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつわって？カレカノ！

【Ｎコード】
Ｎ０１７５ＢＡ

【作者名】
レオ

【あらすじ】
よくモテる圭吾と音々が偽り彼かのに？！
二人は幼馴染、おまけに音々なんて男勝りすぎて
もう周囲は混乱？！
ドキドキッバタバタッのラブコメディーっ！

＊第１話＊

「あ、あの・・・！ボクと付き合ってください！」
「・・・・・」
世の中、不吉なものだよな。
なんだって、あたしは今一度も会話したこと無い男子に
告白なんてされてるんだろう・・・。
「あの・・・君、誰？」
「あ！えと、僕は、２Ａの本田と言います！」
「本田・・・君・・・（？）」
いや、まじで誰。
２Ａって・・・かなりの賢いお方がいらっしゃるクラスだよな。
「・・・ごめん、知らないし興味ないし、なんか、ごめん」
我ながら酷いとは思うけどさ、こういう振り方じゃないと
あきらめてくれないだろ。多分。

あたしはスタスタと自分の教室に戻る。
今は放課後。そしてあたしは日直。
あぁ、だりぃ。んでもって・・・
「寒い！」
今月は冬まっさかさりの１１月。
そして今は１１月下旬。
はぁ・・・はやく学校おわんねぇかなー。

ここは公立森羅学園。
そこの２Ｄ生徒、井上音々（いのうえねね）。
成績は２Ｄの中では上のほうの人材。（それでもほぼオール３）
所詮は２Ｄ。一番アホのクラスだから、しゃぁないわな。

教室の前まで来ると、中から話声が聞こえた。
『あ・・・あの・・・圭吾君！』
『こんな放課後にどーした？』
圭吾？と・・・誰だ？
『わ、わたしと！付き合って、くれませんか？』
また可愛い声の子女の子だな。
多分２Ａ？Ｂ？Ｃ？の女子だな。つか・・・２Ｄに女子いねぇしな・・・うん・・・。
『んーごめん、俺今そういうの興味ないんだわ。ごめんね』
『えと、じゃ、じゃぁ！お友達・・・から・・・』
『ごめん、俺お堅い女の子とはあわねぇの。』
『え、でも・・・！』
『もういい？俺、課題のこってんだ』
『・・・圭吾君のバカ！』
そういう声とともにドアがいきなり開いて
その告白をしていた女子は去っていった。
あたしは教室に入って、圭吾に声をかける。
「これまた酷い振り方だな」
「あれ。聞いてたのか？」
「まぁね。あたしもさっき告白されたばっかりだから。」
「お前もまたなんだな。で？結果は？」
「もちろんふったっつーの」
「だーよなー。てか、お前の振りかたもどうせ大概だろ」
「まだましだろ。『ごめん、知らないし興味ないし、なんかごめん』って言って
帰ってきただけだから大丈夫だろ」
「いやいや、かなり酷いと思う。俺ならなくぜ？」
「しらねぇっての。はぁ・・・告白なんてもうまっぴらごめんなんだけどー。」
「だーよなー・・・あ、俺！ちょっといいことおもいついた！」

「は？なに？」
あたしは自分の席について、頼まれた資料閉じをはじめる。
「俺ら、付き合おうぜ！」
「・・・はぁ？」
「大丈夫。い・つ・わ・り！の彼かの！だからさっ」
「・・・はぁ・・・？」
「え、きにくわねぇ？」
まぁ・・・そりゃ気に食わないけど・・・
だって、幼馴染の圭吾とあたしが付き合う（いつわりでも）とか
なんか、気がひけるんだよなー・・・
いやまぁ・・・でも、適作かもしれないな・・・
「よし。のった。これで断る口実ができるもんな」
「よーっし！決定！俺らは偽り彼かのっ」
「よろしく！」

こんな感じでできた偽りカレカノのあたしたちの関係。
相手は幼馴染の瀬戸圭吾（せとけいご）。同じく２Ｄのアホ。
てか・・・
「ちょ・・・とにかくさむいんだけど・・・」
「課題終わらせてさっさとかえろうぜー」
「だなー・・・。って、あたし課題じゃないし！お前だろ」
「まぁまぁ。」

＊第2話＊

次の日。
あたしたちはいつもどうり二人で登校。
まぁ・・・家が隣だから仕方が無い事だと思う。
だって、家から出るタイミングまでも一緒なんだよ・・・？
「ういーっす、おはー」
「おはよー。ふぁ・・・眠い・・・んでもって寒い。」
「お前昨日から寒いばっかいってんじゃん。大丈夫かよ」
「まぁ・・・大丈夫なんじゃね？多分ー」
「ま、ならいいけど。てか、その男口調いい加減直せば？」
「はぁ？んなだること、なんでしなきゃなんないの」
「いや、なんとなく。あー、なんでんなの好きになるのがいるんだか」
「うっさーい。圭吾だってわっかんねーよ」
「まぁな。おっ・・・と。俺らそういえば恋人同士なんだっけ？」
「あぁ・・・そういえばそうだったな。普通にしてればいいよな？」
「んー・・・それじゃだめなんじゃね？」
「えー。じゃぁどうすんの」
昨日まで幼馴染だったやつとカレカノの振りでもしろって言われて誰ができるんだ。そいつ今すぐ俳優に売れ、って話だよ。
「こういう感じじゃね？俺前付き合ってたときこんな感じだった」
そういうと、圭吾はあたしの手を取って指を絡めた。
ゆわる、手をつなぐと言う恋人らしい行為。
「へぇ・・・。あたし付き合ったことないからわっかんねー」
「だよなー。所詮音々だもんな。所詮。」
「うっせー、ほら、学校近づいてきたぞ」
「恋人らしく・・・って言ってもさらっとな、さらっと」
「別にいつもと普通にしとけばいいんだろ？あたしは。」

「まぁな。俺が誘導するから心配すんな」
「・・・信用はできねーけどまぁ、信用してやるよ」
「うわ。かわいくねーの」
「前からだっつのー」

門をくぐり、教室に向かう。
さすがに周りの視線がかなり刺さる。
まぁ、そりゃそうだろう。
この学園のＮｏ１にモテてる男女が手つないで歩いてんだよ？
そりゃみんなこっち見るだろ。
ちょいちょい聞こえる周りの声にあたしはイラッとした。
「なによ、あいつ。圭吾君と手つないじゃって！」
「圭吾くんも圭吾君よ！昨日あたしを振っといて・・・！」
あぁ・・・昨日ふられた女子か。
ご愁傷様でした。
こっちは男子の声。
「圭吾のくせにして・・・！なんで音々と！」
「２Ｄの大事な女子なのになぁ？！」
なにか大事な女子だよ。
いつも手荒に扱うくせに。
「なぁ、走っていい？」
「は？」
「あたし今すぐにでもこの状況から逃れたいんだけど。」
「あぁ、まぁ俺もそれは一緒だ。んじゃ、走るか」
ダダダダッと走っていくあたしたちを回りは呆然とみていた。
どんだけものめずらしいんだよ。

教室に入ると、いきなり男子たちに囲まれる。
「お前ら付き合ってんだって！？」
「告白したのは音々とか！」

「初キスはもうすんだとか！」
「なんだよーっ！じゃぁＨもおわったのかぁ？！」
「てかいつからつきあってんだよーっ」
・・・・・・。
どっからんな噂が回った。
誰だ。回したやつ。
いますぐぶっ飛ばす・・・
かなりプッチンきてると圭吾が耳元で
「切れるな。俺もかなり我慢してるから。」
と言い、男子たちの話にあわせた。
「そうだよ、付き合ってんの。まぁ幼馴染だしなぁ？」
「告白はどっち？」
「残念ながら音々じゃなくて俺だよ」
「初キスは？！したのか？！」
「まだだよ、あほか。昨日付き合い出したのに」
「じゃぁＨもまだ？」
「・・・てめぇぶっ飛ばすぞ？」
ケラケラと笑いながら席に着く圭吾を見て
あたしはため息をつく。

どーやったらあんなけ気楽に生きられんのか。
さっぱりわかんねぇの。

頬杖ついてぼーっとしてると、不意に頭の上から声がした。
「ねぇ、ほんとに付き合ってるの？」
この声は・・・昨日の圭吾に告白してた女子か。
「ほんとだよ」
「じゃぁ証拠みして」
「はぁ・・・？」
「付き合ってる同士なら、キス、できるでしょ？」

・・・この女、なにいってるつもり？
キス？圭吾と？
は・・・んなのありえないんだが・・・
「ねぇ？圭吾君。」
うわ。わざとらしい。
「っ・・・・できるにきまってんじゃん？」
一瞬つまったものの、圭吾は普通に答えた。
いや・・・できないだろ。
つか・・・あたしその場合ファーストキスは圭吾ですか？
「じゃあ、いまやってよ。」
「わぁったよ」
圭吾はかったるそうにこっちにきて
あたしの耳元でささやいた。
「ファーストキスいただきます？」
うわ・・・腹立つ・・・
てか・・・いつわりの恋人なのに
ここまでしないといけないんだ・・・？
そんなこと思ってると、目の前に圭吾の顔がきて
唇に体温を感じた。
ファーストキス・・・ね・・・・。
圭吾はきっとファーストキスなんかじゃないんだろうけど。
ま・・・所詮あたしだしな。
いつのまにかキスは終わっていて
周りの男子は唖然としていて
もちろんいいだしっぺの女子も唖然としていた。
「ほんとに・・・したの・・・・」
「やれっつったのだれ」
「・・・圭吾君のバカ！」
その女子は教室を出て走り去っていった。
「・・・おれ二日連続でバカっていわれたんだけど。」

「まぁ、所詮圭吾だししゃぁないだろ」
「なっ・・・しっけいな。」
「あらごめんあそばせ、本音がでてしまったわ」
「きもちわりぃ」
「・・・・・・」
正直今のあたしに女口調てのはわっかんね。
でもいつか、女口調になってみたいかも・・・。
「どうした？」
「いーや、なんでもねぇよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0175ba/

いつわって？カレカノ！

2011年12月31日23時52分発行